

「アレルギーの臨床に寄せる」 - 812 -
【矢追インパクト療法】
ANTIDROMIC

東京渋谷 山脇診療所
山脇 昂

矢追インパクト療法は *antidromic stimulation* (神経線維の興奮伝導が逆行性の刺激) です。だからインパクトと刺激的な命名をしたのだらうと思います。

アンチドローミックという言葉には滑走路を逆に滑走するというような意味もあるそうですが、正方向に滑走している飛行機があれば衝突し大事件になります。いなくとも色々の計器類を狂わし破壊することもあると思います。神経線維を逆行することは、通常流れている刺激があり、逆行する刺激が抵抗として加わります。どちらも電気刺激ですから、瞬時に抵抗が強く働き、摩擦熱を生じます。摩擦熱が強烈だとアナフィラキシーになると思います。摩擦熱が弱いと温かさとなり、抗酸化作用を生じます。体が温かくなり、基礎体温が上昇し、筋肉、関節等柔らかくなり可動性が増すと思います。これが神経軸索反射です。この反射は通常アナフィラキシーショック、声門浮腫等をもたらす不利益反射と考えられています。この反射を不利益反射としてではなく、抗酸化作用を生じ、利益反射として有効に利用できる創作医療が矢追インパクト療法です。実際燃えるものは筋肉中の脂肪酸です。これは筋肉運動を遣って体を温かくすると同じ事になって、運動の代替療法になります。運動など不可能な寝たきりの人にもでき、リハビリになり、糖尿病の人の運動代替療法としても最適です。このように不利益反応の危険性と有効性は紙一重であり、〈虎穴に入らずば虎兇を得ず〉と同意です。糖が燃焼しても、現在以上に体が温かくなりません。インシュリンを注射しても現在以上に体は温かくなりません。反対に感冒等で高熱を発すると筋肉痛・関節痛等が生じますが、これらは高熱を作るのにエネルギーが使われ、筋肉・関節等で通常使用されるエネルギーが枯渇した状態になり、だるさ・痛みが生じるものと思います。矢追インパクト療法はそこ（適度に体温を上げる）を狙って、現在行われている減感作療法をより安全に行えるように工夫、改良をした矢追博美先生の創作療法です。数

種アレルギー液を50%グリセリン液で超微希釈し皮膚浅層（皮内）に注射する方法です。

グリセリン（グリセロール）については、生物の油脂には大量のトリアシルグリセロール（トリグリセリド）が含まれています。これは脂肪酸とグリセリンのエステルであり、加水分解によりグリセリンと脂肪酸を生じます。グリセロールは生体内では中性脂肪、リン脂質、糖脂質などの骨格として存在しており、筋肉内に貯蔵された脂肪からエネルギーをつくる際に脂肪酸とグリセロールに分解されます。脂肪酸からアデポネクチンによりATPキナーゼが生じ筋肉の収縮・強化に使用され、生じたグリセロールはATPによって活性化されグリセロール3-リン酸となって再度脂質の合成に使われるか、さらにジヒドロキシアセトンリン酸を経て解糖系または糖新生に利用される。つまり矢追インパクト療法は糖を利用しない脂肪酸燃焼経路で体を温かくする。運動と同じ効果があります。そして血中中性脂肪を随時測定していきますと低下して行きます。グリセリンは摂取しても特段大きな害はないが、皮膚や粘膜に対して軽い刺激性がある。この刺激性が皮膚浅層に注射することで、拡大し、滲みするような痛さとなって広がって行く。そのことはカプサイシンやショウガやワサビ等の刺激のように「内なる外」である体中に広がり、体は温かくなります。これらもアンチドローミック刺激が伝導し、熱を生じます。そして抗酸化作用をします。抗酸化作用とは錆を防ぐ作用、人間には老化に抗し、逆の若返り作用です。つまり矢追インパクト療法は若返り作用をしています。そしてこれら刺激性食物より格段に効果があります。赤ちゃんのアトピー性皮膚炎・喘息・アレルギー性鼻炎等は食物・環境状態の悪化等で生下時或いはすでに胎内から急速に老化が進んでいると見る事もできます。そして矢追インパクト療法はアトピー性皮膚炎等アレルギー疾患に特化した治療法ではなく、もっと大所高所から見て治療していることが解かります。矢追インパクト療法には適度に体を温かくする作用がある。この基礎体温を上げることが最も大切な現象です。これが筋肉運動の代わりになります。インシュリンには体温を今現在より上げる効果は有りません。そうすると糖尿病からほとんどの病気に対応できます。アンチドローミック刺激は又 *Counter-irritant stimulation* と同義です。関節リュウマチ・うつ病等 *deep inflammation* に良く効きます。